

な か ま

発行
佐倉市立中央公民館
編集
な か ま 編 集 委 員 会
〒285-0025
佐倉市 錦木町 198-3
電話 (043)485-1801

2 ページ	ごめんね だけど有難う..... 菊地 一 男	「江戸時代」を見直す..... 木村克俊
3 ページ	物ダイエット..... 灰谷由利子	奥の細道紀行のお礼参り..... 嶋田勝己

さらば青春

巴 安治

鏡に写る顔に時の経過を思い知らされ、節々の痛みが日常となり、油っこい食べ物に苦手になってきた今日このごろ、これまでになく若さに目が行くようになった。

「若いというのはすばらしいことだ」、「若者には将来がある」、果ては「若いときに戻りたい」等々、若者をたたえる言葉は数々ある。それにひきかえ年寄に対するものは、長寿をたたえる言葉ぐらいか浮かばない。

はたして、若さはそんなによくて、年をとるとはそんなにつまらないことか。因みに私は、若さをうらやましくは思っても、「若いときに戻りたい」とは思わない。

「若いというのはすばらしいことだ」ということを、若い人自身が口にするのはまづない。若さは健康と同様、

失ってはじめて気付くもの。その真つ只中にいる者は、若さの有難みなど、さして感じてはいない。

「若者には将来がある」のは、成長という変化を見込まれる若者の特典であり、向上心のよりどころである。但しそれは、追い求めるほど大きな苦痛をもたらす。不確かな明日のため、今日を犠牲にしまの自分を否定しなければならぬ苦しみである。この点、成長の時期をとうに過ぎた年寄は、いまの自分を生きしめないで、そうした苦しみからは免れている。

いまの自分を生きるということも否定しないで、自身の個性として受け容れていくこと。それは若いころには無理であったが、還暦を迎えたころからそうでもなくなってきた。

それまで欠点としか見えなかったことにプラス面を見るようになったからであろうか。他の人の「欠点」に対する見方も同様である。

勤めから解放されていちばんありがたいことは、自分が自分でいられる自由。これらが本当の自分の人生では、とさえ思う。こうした思いは、いまの自分を受け容れることなしにはあり得ないだろう。私が「若いときに戻りたい」とは思わない理由は、どうやらこの辺にありそうだ。

各自が自由に描ける場面だけでなく、第二の人生の濃淡は自分次第。水の流れのごとく低きを求めてばかりでいると、ボケの進行を速め、それこそ自分が自分でしかいられないなんてことになりかねない。

そうならないためにぴったりの標語に最近出会った。中でも三番目がいい。

汗カク 字をカク 恥をカク
(編集委員)

ごめんね だけど有難う

先日、電車に乗ってつり革につかまりボンヤリと景色を眺めていたら、前の席に座っていた20歳に少し前位の青年が意を決した様に立ち上がり、私に「どうぞ」と席を譲ってくれた。

私は、普段から、電車ではなるべく座らない様にしており（健康のためだとか何とか理屈をつけているが、本当は私が人に席を譲るのが面倒だからである）この時も「有難う。だけど僕はなるべく立つことにしているから」と言っていて断ってしまった。

青年は、「そうですか」と言っただけでまた座ってゲーム機を取り出して操作を始めたが何となくガツカリした様子に感じられた。その様子をみて私は「しまった」と思った。

青年は、目の前の老人に席を譲ることかなりの勇気を

要したのではないだろうか。

そして老人は当然喜んで座るものと思っていたのではないだろうか。ところが老人は断ってきた。青年は拍子抜けし、そして「なんだ、こんなことなら余計なことをするんではなかった」と思ったろう。老人が喜んで座ってくれれば青年はその日一日、明るい気持ちで過ごせただろうにその逆にさせてしまった。

それやこれやで私は大いに反省し、次の駅で黙って降りていった青年に心の中で謝った次第である。

青年よ、私はこれからは若い人から「どうぞ」と言われたいから「どうぞ」と言われたいから喜んで受けることにする。だから君も、今度のことに懲りずにどうか人のために席を譲ってやってくれたまえ。

（白銀 菊地一男）



「江戸時代」を 見直す

江戸時代は、士農工商の身分制度や重い年貢、飢饉などから、暗く、停滞した時代と思われている。まさに、「暗黒の時代」と。

しかしながら、色鮮やかな浮世絵や江戸仕草の洗練された所作など、文化の香りが高く、豊かではないが貧しくもない時代であったようだ。

例えば、教育面では、多くの子供たちが寺小屋に通い、天保年間（19世紀半ば）は、

一説で寺小屋の数は全国で1万5千と言われている。その結果、識字率は70%にも達し、当時の工業国であるイギリスの20%台と比べても世界で突出した状況にあった。

寺小屋の教師の遺徳を偲ぶ筆子塚も数多く建てられ、子供たちに対する熱心な教育が行われた時代であった。

また、江戸時代は「融通の

効く」、「社会で同じ認識を持った」時代でもあった。

例えば、同一人にも関わらず、本文中に「重左衛門」と文末の署名に「十左衛門」と書いたが、同じ読みのため問題はなかった。また、借用証文には「世間並の利息をもつて支払う」と書く場合があったが、貸手と借手に暗黙の共通認識があり、「お天道さまに顔向けできる利息」と了解していた。文書主義を取る私たちは奇異に感じるが、融通の効く、同じ認識を共有する社会と言うのも悪くはないようだ。

今の私たち時代は、「勝ち組と負け組」や「ワーキングプア」などの若年層の閉塞感、社会保障費の増加とその負担感等の社会の歪みが噴出してきているが、江戸時代の仕組みや生き方を知り、少し視点を変えてみるのも役に立つのではないだろうか。

（鍋木町 木村克俊）

物ダイエツト

断つ、捨てる、離れる、『断捨離』。本当に必要なものだけ、ガラクタに囲まれない生活。耳が痛く聞こえた言葉で、我が家に一石を投じた本であった。

これまで何度も、折にふれ押し入れを、引き出しを、開けては捨てられず、場所は替えても、またもとへ戻す。そんなことの繰り返し。もったいない、いつかまた使うかも、とりあえずは取っておこう。服だって流行はリバイバルする、いつか又着られる。流行は巡っても、私の体型はどうだろうかとクエスチョンマークが点灯する。

あれもこれも過ぎ去った年月の証であり、それを手放すのは、後ろ髪を引かれ、又、罪悪感さえも感じ、捨てるに捨てられずにいた。こんな自分を心のどこかで納得させて

いたようにも思える。

夫婦二人だけの生活になると、それほど多くの物は必要としなくなる。物に占領されながらも見慣れすぎて、居心地の悪い空間の中で、自分をごまかして過ごしている日々である。

大事なその想いだけ、心の中に大切にしまつて、物への執着からは離れ、身の回りをスッキリさせる。こうしたことは、これからの生き方にも、きつと大事なことであり、常に責任、選択を問いかけられることになっていく。

ここで、重いお尻を上げ、腕まくりをして、これまでの我が家の道程をゆっくり振り返りながら、整理整頓、物ダイエツトを開始して、スマートになり、心地よく住めるように計画している。

(白銀 灰谷由利子)



奥の細道紀行のお礼参り

2006年3月27日の深川スタートから2009年10月15日の岐阜大垣のゴールまで三ヶ年半かけて二人の友と奥の細道を無事に完歩した。これに感謝し、芭蕉稲荷と芭蕉庵史跡公園の芭蕉像にお礼参りに行った。

隅田川を見下ろす展望公園からの眺望がすばらしく、浅草から浜離宮への遊覧船がゆったりと紅葉で彩られた隅田川を下っていた。

日光街道は日帰り歩き、奥州街道からは一泊二日、そして福島から仙台、平泉、山形、酒田、秋田象潟の蚶満寺、新潟出雲崎、山中温泉、永平寺、結びの岐阜大垣までは二泊三日で芭蕉句碑を巡った。1日平均25キロの歩行で、次第に足裏が丈夫になったが、三年目の永平寺を通過する頃から三人の誰かが、足腰の不

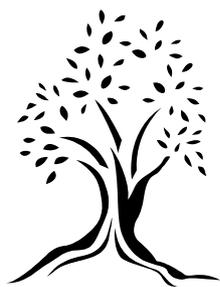
調を訴えるようになった。互いに労り、友情を確かめ合ったことが、走馬灯のごとく思い出される。

「行春や鳥啼き魚の目は泪」から「蛤のふたみに別れ行く秋ぞ」まで訪れた名所旧跡、歴史上の人物や出来事との出合いは大変有意義であった。

帰路、地下鉄木場駅に向かう途中で、都緑化公園を通過して木場の高速道路上のつり橋から完成近いスカイツリーが見えた。小春日和に包まれた晩秋をゆっくり、のんびりと過ごすことが出来た。

今回のお礼参りの企画した友人に感謝し、次回は小生が皆に楽しんでもらえる計画を考えている。

(南白井台 嶋田勝己)



5月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の2ページと3ページは佐倉市民の皆さんから投稿いた

だいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650字（13字×50行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等修正させていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館 TEL 043 - 485 - 1801

〒285 - 0025 佐倉市錦木町198 - 3

わくら道

柔らかな日差しを受けて、とどりの花に彩られる庭先や路地。川原の土手や田んぼの畦にもたくさんの野草。精一杯の自己主張をしながら花を付けている。雑木林や斜面林が、最も豊かな表情を見せるのもこの季節。黄色に黄緑、赤や橙、白いものもある。一斉に芽吹く若葉の微妙な変化が美しい。常緑樹も負

けていない。もこもこと、まるでブロッコリーのように、明るい緑の塊が盛り上がる。ひときわ目を引くスタジイの新緑である。
爛漫の春、まさに「山笑つ」季節の到来だ。
東日本大震災から二ヶ月。深い悲しみに覆われた被災地にも、山笑つ春は必ずやってくることを信じ、長く険しい復興への道を進んでいこう。

（松山洋子）

あとがき

菊池さんの作品を読んで、久し振りに、人の心の思いやりに心を打たれました。この様な作品を読んだ方が、心を動かされ、それなりに、感動を波紋のように更に広げて行くことだろうと思います。

昨今、江戸時代が、見直されており、封建時代という言葉で十把ひとからげに葬り去られていたものが、実はいかに合理的

かつ経済的な諸制度が庶民生活に取り入れられていたか、木村さんの作品にも示されています。
全体を的確に把握しないと、「断捨離」は、物品でも、心の問題でも、世渡りにおいても難しい事ですね
三年間の「奥の細道」紀行お疲れさま。この経験が今後の人生に一味加わってくることになると思います。結果報告をお待ちします。

（服部一宏）